rongorongo

茨城キリスト教大学
文化交流学科

題字の背景画像は rongorongo の文様から作成したものです

茨城キリスト教大学文学部文化交流学科　〒319-1295 茨城県日立市大みか町６－１１－１　TEL 0294-52-3215　FAX 0294-52-3493

今年も暑い夏が来た！ ひたちサンドアートフェスティバル！

7月17日、日立市河原子海水浴場にて「ひたちサンドアートフェスティバル」が開催されました。大人から子どもまでたくさんの方が参加、ひたちを盛り上げました。

本学から参加した岩間ゼミの学生から参加した感想を頂きました。

子ども達も一生懸命作りました。上手にできたかな？

涙がでそうなほどの感動

文化交流学科4年次　上杉　知礼

私は岩間先生のゼミを通じて、河原子フェスティバルに参加しました。去年も参加し、今年は東日本大震災の影響で実行できるのか心配でしたが、実行委員会の方々の熱い思いは変わらず、逆にこんな時だからこそやるべきだということで、盛大に開催されました。

参加して毎回思うのですが、いろいろな年代の方々と出会うことで学ぶことも多く、普段の生活の中ではあまり関わりが無い地域の人や学校の人と気軽に話すことができ、そこからつながることが出来るという楽しさもあります。河原子フェスティバルの最後には盛大な花火の打ち上げがあります。その時には毎回涙がでそうなほどの感動で、どこで見る花火よりも最高に綺麗です。

【8面へ続く】

韓瑞大学と共同作業 日韓震災ボランティア

7月30日、31日にわたって本学の提携校である韓国の韓瑞大学の学生、教員ら15名が来日し、本学学生たちと震災ボランティアに取り組みました。

とても充実した時間だった

文化交流学科2年次　勝山　友里恵

染谷先生から話を聞いたのが今回の企画参加のきっかけでした。この企画が行われたのは7月末で、3月に起こった大地震、原発事故で放射線の危険性があるというのに、たくさんの韓国の学生さんが来てくれました。来ても5人くらいだろうと予想していたので、こんなに来てくれるとは驚きです。そして、小学校からも多くの小学生が参加してくれたので、にぎやかな交流会になっていたと思います。

韓国の学生さんと小学生とでスタンプラリーを行ったり、皆で昼食を食べたりして、キリストの学生や小学生も積極的に韓国の学生に話しかけていました。私が話しかけた韓国の学生さんに伝わらなかった言葉を英語で言うと、相手がわかってくれたので、英語は大事なのだと改めて実感しました。

少しの時間しか交流はできませんでしたが、とても充実した時間が過ごせました。ぜひ、また参加してみたいと思います。

【6面へ続く】

【野口雨情生家前で】

11年10月号目次

1、8面
◆ひたちサンドアート
1、6面
◆日韓ボランティア
2～3面
◆アジアンボランティア
3面
◆文化交流論講演会
4～5面
◆森謙二先生インタビュー後篇
6面
◆ベトナム交換留学
7面
◆教育実習報告
◆就職活動報告
8面
◆沖縄交換留学感想
◆編集後記

文化交流プロジェクト　アジアンボランティア

毎年恒例のアジアンボランティアが今年もカンボジアの友好学園を舞台として行われました。

今年は参加者が５人と少なく、いったんは今年は実施されないかもしれないとのことでしたが無事実施され、５人の参加者が多くの体験をして帰って来ました。今回はその中から２人の学生に報告を頂きました。

この記事を読んで来年は多くの学生がこのボランティアに参加してくれることを願っています。（編集部　大砂）

自然と涙が…

文化交流学科2年次
砂押　嵩人

とうとう今年もこの季節がやってきた。そう、カンボジアに行く季節だ。私は去年みんなにまた来年来るという約束をし、日本に帰ってきた。最初は、また来年も行くことに多少の義務感のようなものがあった。しかし、だんだんと日が過ぎていくとその気持ちは薄れていき、逆に楽しみという気持ちが大きくなっていった。またカンボジアのみんなに会えると思うと、授業の準備も週に一回のミーティングもすべてが楽しく思えてきた。

もちろん、不安な部分もあった。今年は去年のように先輩に頼ってばかりではなく、自分が中心となってプログラムを実施すること、そして5人しか参加者がいないので授業を一人で行うことなど色々と不安はあったが、とにかく楽しもうと思い深く考えないことにした。

出発の日になった。飛行機を降り、まず最初に、疲れたというよりも、帰ってきた、懐かしい、という感じがした。去年も行ったタイのカオサン通りに行くと、去年喋ったお店の人がたくさんいて、もっと懐かしいという気持ちでいっぱいになった。

このカオサン通りも、先日のカンボジアとの戦争で、何人もの人が亡くなったことと、こんな身近に感じる場所で戦争が起きているということには本当に驚いた。

カンボジアに入り、プログラム開始前日のカンボジア人の学生たちとの食事会で、去年のプログラムに参加していた学生に会った時は思わず飛びついてしまうほど嬉しかった。

そしてプログラムが始まり一発目の授業、一人で全部をやることが難しく、大失敗をしてしまった。それでもその日の晩に他のグループやカンボジア人と細かくミーティングをして、次の日の授業からは大きなミスもなくこなすことができた。

午前中の授業が終わり午後になると去年と同じく、生徒のみんなとスポーツをしたり、いろいろな話をして盛り上がったり、近くの生徒の家に行ったりして過ごした。夜になると、晴れの日には外で横になって一面に広がる星空を見ていた。

授業も終盤になって一クラスずつ最後の授業になった。最初は時間が有り余って早く終わってほしいと思ってしまったこともあった授業も、最後になるともっと長く授業をしていたいとも思うようになった。一日一日が寂しく思えてきた。去年は笑って終わっていた最後の日の授業では、生徒たちに話をしているときに自然と涙がこぼれた。

プノンペンに戻る日、たくさんの生徒たちや村の人たちと話していると、また来てねと言われたので、いつかまた来るねと言ってプノンペンに戻った。

プノンペンでの見学でKAWAIJYUKU DORMに行くと、そこには去年通訳をしてくれた学生のソックンがいた。思わず大きな声をあげてしまった。話を聞くと、ここにはソックンと同じく去年通訳をしてくれた学生のソッカー、今年もお世話になったトニーが暮らしているらしい。

カンボジアを出てベトナムを旅行したときに、ベトナムの戦争博物館を見学した。最初は軽い遊び感覚で行ってみようと思って行ってみた。しかし、中に入ってすぐにその気持ちは無くなった。最初に見たのが、牢屋の写真や拷問の写真だ。同じような写真は去年トゥール・スレンで見たが、何度見ても言葉を失ってしまう。いくら戦争とはいえ、ただ殺すだけではだめなのか、骨と皮だけの状態になるまで拷問をする意味はあったのか、全く理解ができなかった。

次に見たのが、戦争時のアメリカの枯葉剤攻撃による被害者の写真だ。その写真には肌がただれてしまっている人、枯葉剤の影響で産まれた奇形児が写っていた。その中にはテレビでたまに目にする、双子のベトちゃん、ドクちゃんの写真もあった。二人がこの戦争の被害者だということをこの時初めて知った。そして、博物館を見学していて一番驚いたのが、奇形児のホルマリン漬けだった。そこには三人の子供がいた。二人は体がくっついており、もう一人は顔や体がちゃんとできていない状態だった。このような問題は今でも続いているらしい。アメリカはここまでする必要があったのか、なぜ兵士ではなく、関係のない一般の人がこのような被害にあわなければならないのか、自分には全く理解できないことばかりだ。今、授業で戦争のことを学んでいるが、戦争というのはどんな理由があったとしても、自分には言い訳にしか聞こえない。戦争博物館でも疑問の残ることばかりだった。

今回の旅で得たものは多いと思う。自分の身の回りの細かいことから、大きな問題まで、様々なことを改めて考えさせられた。

ふたたびのカンボジアへ

文化交流学科4年次
市毛　孝史

僕は２００９年にカンボジアを初めて訪れた。その時に抱いていたカンボジアのイメージというものは「貧困」「戦争」「地雷」「売春」そういったネガティブな既成概念だ。それらを抱きながら初入国した。正直怯えていた。しかし、鈍器で頭を殴られたようなカルチャーショックを受けた。現地の様子と僕のイメージはまったく違ったからだ。僕は日々を精一杯に生きる人々やその笑顔から平和を感じることが出来た。このことは僕に一種の感動を与えてくれた。メディアで知る情報と実感を持って情報を得るのでは感動の質がまるで違うことが身をもって体験できた。

２０１１年８月、僕はまたここの土地を訪れた。理由がいくつかあった。２００９年に等閑にしてしまったカンボジアの子供たちへの日本語教育のリトライ。ここ二年で身につけた知識・知恵を通して見るカンボジアの世界。カンボジア人の友との再会。これらをすべて果たすことができた。有意義であった。

２０１１年のカンボジアには現在進行形で進む潜在性をもった小さな変化が見られた。交通・電気インフラの充実が２００９年のカンボジアでは見られなかった風景である。それはどこまでも広がる平野のうえの舗装もままならない国道に豚や牛、犬や猫などの家畜や番犬などの動物達にまじって生活する（この風景はリンガ村という所）カンボジア人たちの中に存在していた。カンボジアは静かに、確かに前へ進行していた。

僕は２００９年にカンボジアを訪れたのを機に様々な国を訪れ、旅をした。これらの経験は文化交流という名のもとに好奇心と行動力を刺激され、冒険、知の冒険へと駆り立ててくれる。この冒険では社会を見る視野が広がり、能動的に自己を開発するきっかけにもなる。これはとてもワクワクすることだ。こういった意味も含め僕は文化交流を実感を持って体験する入り口として、カンボジアをおすすめしたい。

卒業生に聞く！

文化交流論　講演会
外国人に日本語を教える

日本語教師として活躍している本学の卒業生の行田さん。実際に働いていて感じることや、日本語教師になったきっかけなど様々なことを話して下さいました。そこで講演会の内容について簡単にご紹介するとともに感想を述べていきます。日本語教師の世界に浸ってみてはいかがでしょうか。

こうだ・えつこ氏
茨城キリスト教大学　児童教育学科卒業
成蹊大学国際教育センター　日本語講師
特定非営利活動法人ジャパーン・リターン・プログラム（JRP）
アカデミックプログラムコーディネーター

「現在は15～20人のクラスを受け持っており、毎日がアドリブの連続です。授業でのモットーは、学生が日本語を使ってコミュニケーションをすることです。」

そんな行田さんが日本語教師を目指したきっかけは、「世界的にみて日本語を勉強している人はいるのだろうか？」と思ったことだそうです。

「学生時代は英語が全くダメでした。しかし国際交流は好きだったんです。なのでホストファミリーとして外国人を受け入れたりしました。」この経験をしたことで、「日本人が勉強をしないと国際交流ができない」といった今までの考えが、その逆である「日本人が日本語を教えるという手段での国際交流もあるんだ！」という新たな発見につながったそうです。

そんな経験もあり、「世界の人と友達になりたい、好きなことを仕事にし、挑戦したい」という思いから日本語教師への道を歩んできました。

実際に教師になってからたくさんの苦労があるそうですが、普段会うことのできない国の人と交流ができるたのしさ、そして何よりもやりがいがある仕事とおっしゃっていました。

講演会に参加して、実際に日本語教員として活躍している方のお話を伺うのは初めての経験だったので、とても新鮮に感じました。外国人に心の底から日本語を勉強したいという気持ちを持ってもらうのはとても大変なことだろうと思います。

しかし、その気持ちを感じさせることができた時、心から日本語教師のやりがいを見出すことが出来るのではないのだろうかと感じました。他国の方に自国の言葉を伝える大変さ、そして面白さを感じることのできた講演会でした。

【編集部　中根梨紗】

森 謙二先生ロングインタビュー 後篇

前篇から引き続き、後篇では沖縄のことや学生へのメッセージなど盛りだくさんの内容です。（文責…編集部）

沖縄でのんびりと 自分自身をみつめられる

―森先生は沖縄留学を担当されていますね。

沖縄大学に大学時代からの友人がいて、沖縄での研究調査が始まったので、それをきっかけに沖縄留学も始まったのだと記憶しています。沖縄大学では、すでにいくつかの大学との交換留学を始めていたので、うちの大学でもどうかという話がありました。最初他の先生達は誰も乗り気ではなかったのですが、学生に聞いてみると「面白そう」というので始まったのだと思います。

それで、入試広報部に沖縄留学というのを出してみると多くの反響があったので、現在まで続いているのだと思います。

沖縄留学は、沖縄大学にとって、大学間の交流だけではなく、大学の活性化にとっても大きな意味があるのだと、沖縄大学の先生から言ってもらい、多少安心をしました。

「留学」一期生の吉岡さんやそれに続いた学生達は、沖縄大学で活発な活動を行いました。留学を終えて帰ってきても「交流会」を開催し、沖縄大学から学生を呼んだり、本学の学生も沖縄に行ったりして「交流会」を継続しています。これは学生達の力によるもので、私はそのお手伝いをするという感じです。とにかく、学生達のエネルギーはすごいものがありましたね。

沖縄の人達は非常におおらかで、学生達を優しく受け入れてくれるんですよ。沖縄への留学に意味があるのは、沖縄の地はギスギスしている都市部とかじゃないから、少しのんびりと自分自身を見つめることができることだと思います。親元を1年ぐらい離れて生活してみるのも良いかもしれない。夏休みくらいは茨城に帰ってくればいいと思うけれど、留学した学生は帰って来たためしがないよ。夏も沖縄にいた方が楽しいもんね。むしろ、夏休みには親が沖縄に行ってますね。

沖縄で1年間生活したっていうのはね、みなさんの就職にとってはすごく有利に働くと思いますよ。アピールするものができる。だからね、履歴書にも書いておいた方がいい。

―先生の学生時代と今の学生の違いはありますか？

学生時代は、自分たちでダンスパーティーを主催したりしました。そのダンスパーティーに、十数万円もかけて自分達で一流のバンドを呼ぶ。我々の時は、今の婚活ではないけれど、知り合う機会を自分達で作りました。ただ、それを目的にやった訳ではないけれど。たしかにそれを企画、遂行するなかで、定期的な打ち合わせは合コンのようなものであったのかもしれないけれど、しかしもっと私たちは手間を掛けました。この企画は、複数の女子大と組んで、大学としては5校とか6校とか一緒になり、共同で行うのでその組織化もたいへんな作業でした。バンドに支払うお金だけでも費用は二十万から三十万くらい掛かるかな。売り上げの半分程度は利益になって、あとの半分は部活の活動費用となる。クラブ活動資金を稼ぐというのが、お金を儲けるため大義名分になっていましたね。

こういう努力を今の学生はあまりしないように思いますね。この間、たまたまゼミの中でも話をしたのだけれど、「男女が知り合う機会って今はどこ？」って言ったら「バイト先と学校」って。学校で知り合ったのは大体ものにならない。同じ学校ってカップルができる可能性は低いと思っていました。昔から「釣り堀」ってよく言っていたのだけれど、釣り堀で釣った魚はあまり大切にしないんですよ。（笑い）だから、そうなってくると、ときたま会うのが良い。外で知り合うことに対して「バイト先」だっていう。バイト先……これはちょっと。

学生はもっとそういうことを努力して、勉強することももちろんですが、遊ぶことに関しても、受け身ではなくて積極的に遊んでいかないと。沖縄に学生を連れて行ったりして、沖縄大学の学生と会わせたりするのだけれど、そこから発展しないよね。その時だけなんですね。だから、もうちょっとつきあいは深まっても良い。我々は、そこから「どこかへ遊びに行きなさい」なんて言うわけにいかないし、会わせるところまでなんです。そこまではできるかもしれないけど、そのあとは自分達の才覚なんだ

【インタビューの様子】

他人に依存するのではなく、自分がやりたいことをみつけること

ろうと思うけれども。

そういう場所を自分たちでどれだけ作れるか。難しいよね。やる必要はあると思うけどね。やっぱり学生時代からやらなきゃいけないんじゃないかな。

日立市でも未婚化・少子化が進んでいるので、知り合う機会を提供するものを作らなければいけないと思って、一番最初の時期に提案して、「出会いの場」をくつるという試みを始めたのです。市役所が「市がお見合いパーティのようなことをやることに関しては、どうか」とかっていうような反対論があるのだけれども、でも、客観的に考えてみて未婚化が進んでいます。今、茨城県で独身率が高いのはどこの地域だと思いますか？　実は日立がものすごく高い。あとは、茨城県内ではつくばで、トップ争いをしているように思いますね。

日立市の小学校、中学校に少子化対策の一環として小冊子（『君たちへ』）を配りました。男女はお互いが協力しながら、とにかく自分たちの新しい家族を築いていった方が良いってことを、書いたパンフレットを作ったんです。それを中学生全員に配るんです。そういうものを作って、そのあたりから少し、結婚する意識を高めていって。そういうふうなことがもう十年くらい前から始まっているのですよ。

うちの学生も、この活動に掛け合わせたんです。学生が「お見合い相手」ではなくて、この活動のボランティアとして活動してみてはどうかと思ったのですが、一番最初の段階では少し機能したのですが、後に繋げていけないんだよ。「自分が楽しみたい」と思ったのかなぁ。でも、自分のためだけではなく、社会が何を求めているのかということ、自分が何をしたらよいかということを考えてはどうだろうか。本当は、「婚活クラブ」みたいなのができて、自分たちの企画を出していけば、それなりの活動ができると思うのですが……。

―「婚活クラブ」、面白そうですね。

どんどん繋げていけるような感じがしてね。婚活クラブとか作ったら、日立市の活動や世の中の動きともリンクできる。色々とやることはあると思うのだけれど。また、日立市内で結婚式を挙げ、日立で住みましょうというのも、日立では必要なことだと思います。

たまたま、日立の人口構造を見ていると、皆さんくらいの年代が、一番、卒業すると地元からいなくなる。「この子は、絶対日立の中で就職が決まる」と思った学生が実際は県外だったりする。「これはまずいんじゃない」って。優秀な人材が逃げることになるでしょ。日立の中でもっと、優秀な女性が残れるような、そういう構造を作らないと。何と言っても女性のきちんとした職場があれば。みなさんのような大卒の女性が希望を持って就職できるような環境を作っていけば、日立もよくなる。

ひたち学っていうのは、そういうことがきっかけになって始めたんです。日立のことを知りましょう、ってこともあるんだけど。

―本学も女性が多いですよね。

僕は、茨キリの女子大生は優秀な人が多いと思うよ。短大の時代からそう思ってました。今、昔のように女性が多くなってきているでしょう。やっぱり、茨城に優秀な子が残っているように思います。都会の学生を見ていても、茨キリには他の大学に負けない良さがある。男性はもう少し頑張れと言いたくなるけどね（笑い）。

特に、文化交流学科はよくなったと思いますね。レベルが高くなってきました。特定の資格に結びついた学科ではないから、そういう意味では特におもしろい学生が集まってくる。最初の文化交流学科は定員がなかなか満たなかった。本当にギリギリで本当に全員合格させるような感じでした。もしかしたら文化交流学科がなくなるのではないかとという危機感も持っていて、それで何かしなくちゃいけないと「ひたち学」とか色々始めた。他の先生は中国とか韓国、カンボジアとかベトナムなどに連れて行ったりするようになったのもこの頃ですね。このあたりぐらいから、前を向いて学生達は歩き始めたというか。そういう意味で、人間として基礎的なものが身についてきたというかね。

現在は、もうあと一つ新しいことを始めなくてはいけない。たぶん、他人に頼るのではなく、自分で何ができるかを考える時期に来ていると思います。文化交流学科は一時期、大学でも群を抜いて就職率がよかった。でも最近は他の学科と変わらなくなってきた。また追いつかれてしまったから何か考えなくてはいけない。

―先生に何か案はありますか？

やっぱり、自分で努力して人間関係を作る努力だと思う。もちろん、日本人だけではありません。外国人とも人間関係を作る必要があります。

そして、他人に依存するのではなく、自分がやりたいことを見つけることだと思います。そのためには、いろんな人と知り合う機会、もちろん男女の交流も含みますが、他人と会うこと・話すことによって自分を見つけることだと思います。「他者は私を映し出す鏡」ですから。そのためには、大学の中でそういう文化を高めるというか、お互いの人間性を高めるっていう意味でこういう場所があってもいいのかもしれないね。

【1面から続き】

【北茨城でのボランティア】

ました。そこに興味はあったのですが、行く機会がないと思っていたところだったので、とても運命のようなものを感じました。

雨情の生家は古風な家で、まるでお祖母ちゃんの家を大家族で掃除しているようで楽しかったです。

高萩やいわきに足を運び津波の恐ろしさを目の当たりにしとても意味のある一日になりました。

津波のおそろしさ

文化交流学科2年次
黒川　由香里

私は来年韓国に留学することを考えているので韓国の学生と関わることができるこのボランティアに参加しました。

当日、野口雨情の生家に行くことを知り驚きました。私はゼミの授業でちょうど詩人について調べていて、この日の数週間前ぐらいに雨情が北茨城出身ということを知り

ベトナム長期交換留学 ～中間報告～

ベトナム・フフリット大学との交換留学制度を利用した長期留学が今年初めて実施されました。

新しい環境の中で生活していくために必要なことや、これまで体験してきたこと、大学での生活についてなどを、これから後に続く人達のためにも今年の留学生から留学の中間報告を頂きました。

自分の視野を広げるために

文化交流学科　4年次
木野内　澄美

ベトナムへの留学が決まったとき不安は全くなく期待でいっぱいでした。ホーチミンに着くと予想以上に街に日本で見慣れたお店や看板があったことに驚きました。

フフリット大学で授業が始まったのは2月末でした。それまでの間大学への挨拶やさっそくできた友達にベトナム語の発音を教えてもらったりしていました。初めての授業は発音から始まりましたが翌日からは会話や読解などが始まり、授業のペースがとても速いです。先生によっては南部、北部の方言で話をするので初めのうちはかなり混乱してしまうと思います。6月中旬にテスト期間だったのですが、ほとんど教科書の内容で並び替えや、テーマに沿って自分で作文するものでちゃんと勉強していれば大丈夫です。

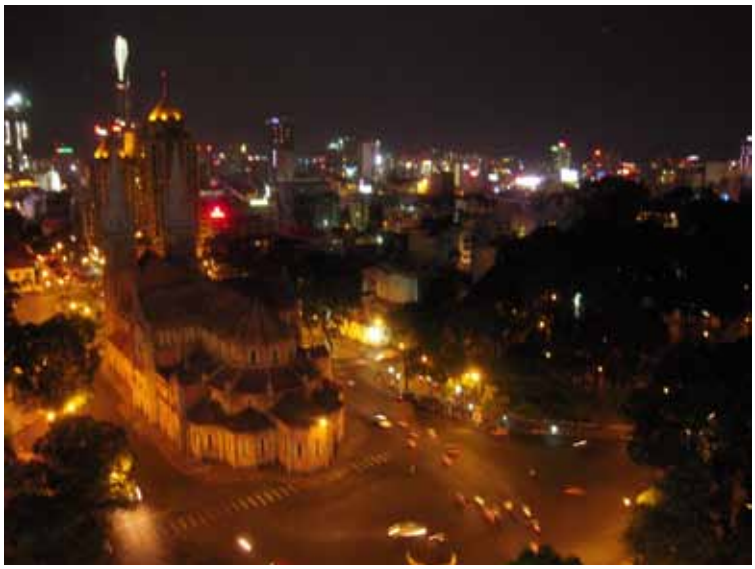
フフリット大学の学生はとてもフレンドリーで優しく可能な限りバイクでどこでも連れて行ってくれます。またいつでも遊びに誘ってきますが、急なドタキャンも当たり前です。

私は学校の近くのアパートで独り暮らしをしているのですが、洗濯機がなく手洗いなので手が物凄く荒れてしまうかもしれません。もし、ベトナムに留学するなら洗濯板とハンドクリームを買っていった方がいいと思います。

自分で移動するときはバイクタクシーを利用することもあると思いますが、その時は乗る前に値段交渉をしなければぼったくられるので気を付けたほうが良いと思います。日本人はお人好しということで有名なので時々交渉した金額よりも多く貰おうとする運転手もいます。

最近では交渉が面倒なので学生から自転車を借りて自分で移動するようにしていますが、もしかしたら交通事故に遭うかもしれません。私の場合後ろから来たバイクがすれ違いざまにぶつかって転倒しましたが、警察を呼ぶこともしないし示談ということもせず、ぶつかってきた運転手はそのまま行ってしまいました。

ベトナムに住んでいると日本にいるときより大変なことが予想以上に多く、怒ることも落ち込んで泣くことも増えます。しかしそれをバネにメンタル面では強くなれるし自分の視野も更に広がると思います。その面では私は留学してよかったなと思います。残りの4か月余りの留学生活を楽しく過ごせたらいいなと思います。



ホーチミン市の夜景

教育実習を終えて

文化交流学科4年次　小池　夏子

6月6日から6月24日までの3週間、教育実習に行ってまいりました。自分が卒業した中学校へ行き、日本史と道徳の授業を行いました。

試行錯誤の連続

教育実習は、事前にたくさんの授業と準備を重ねなければならず、緊張と不安がいっぱいでした。「先生としてしっかりと行動できるだろうか」「分かりやすい授業ができるだろうか」など、心配事が尽きることはありませんでした。

実習が始まってからも緊張感は続きましたが、非常に充実した3週間を送ることが出来ました。私が担当したのは1年生の日本史の授業だったので、どうすれば楽しく学ぶことができるか、正しく分かりやすく伝えるにはどうすればいいかなどの試行錯誤を繰り返しました。自分で考えた授業を行い、その授業が成功した日もあれば失敗した日もあります。それでも生徒たちから「先生の授業、分かりやすかったです」などというような感想をもらい、とても嬉しくなりました。そしてその生徒たちからの感想や、実習先の先生方のご指導をもとにしてよりよい授業ができるように努力しました。

【授業をする小池さん】

大学では得られないもの

もちろん授業だけではなく、休み時間や給食の時間、部活動の時間など、生徒とのコミュニケーションを通して、大学の授業だけでは学ぶことのできない、生徒・教育の実際について学ぶこともできます。正しい教師像というものを模索しながらの交流は非常に大変ですが、自分への課題などを見つけることができた貴重な経験となります。

教育実習の3週間は、大変だと感じることはたくさんありました。しかし、それ以上に得るものが多くあった素晴らしい時間でした。実習を通して学んだこと、感じたこと、自分への課題を忘れずにこれからの自分の成長へとつなげたいです。

就職活動報告

就職活動の厳しさが叫ばれている昨今、内定を勝ち取った本学科の４年生に経験談を語って頂きました。現在就活を始めている３年生だけでなく、１・２年生にも参考にして頂ければと思います。

いろいろな自分の経験が就職活動では大事

文化交流学科4年次　宇野　太智

警察官を目指したきっかけ

私は、茨城県警察本部から内定を頂きました。

警察官を目指したきっかけは単純に白バイに憧れたからです。

自信を持って解けた問題はほんのわずか

採用試験の勉強を始めたのは2月の後半でした。途中で大震災の影響もあり、本格的に勉強を始めたのは4月からでした。始めたのが遅かったため模試でも点数が取れず何から手をつけていいかわからないまま時間が過ぎて行きました。

茨城県警よりも10日ほど早く警視庁の採用試験があり、正直自信を持って解けた問題はほんの2、3問程度でした。それからは勉強法を変え比較的問題数の多い科目に絞って過去問を片っ端から解きました。

面接は自分をどれだけ知っているかが重要

二次試験は個人面接と集団討論だったのですが、キャリア支援センターの皆さんにほとんど頼っていました。面接では自分をどれだけ知っているかが大切になると思います。

就活から得た事は夢に向かって頑張る

職種に限らず、いろいろな自分の経験が就職活動では大事になると本当に思います。何か夢を持ってそれに向かって頑張ることを就活から学びました。

沖縄交換留学を終えて

文化交流学科3年次　大塚 美波

私は前期間、沖縄県の沖縄大学に交換留学に行ってきた。私は今まで、将来が見えなくて、夢も目標もなかった。地元から出たことがなく、違う土地や環境でひとりで生活してみたかったこと、また、かつてアメリカであった沖縄には、独特の文化や歴史があることに興味を持ったのが、沖縄留学を決めた理由である。

沖縄での生活は、やはりこちらとは文化が違うと感じたことが多かった。気候、地理や自然環境をはじめ、言葉、食生活、生活スタイルなど、驚くことが多かった。大学では、沖縄の言語、自然、地理、歴史、戦争史、観光業など、沖縄についての講義を主に受講した。

沖縄独自の文化があることはとても素晴らしいと感じたし、なにもかもが知らなかったことばかりで、新鮮で楽しかった。

また私は、大学の吹奏楽部に所属し、観光客向けのライブハウスで、沖縄民謡を演奏したり、老人ホームや幼稚園、同窓会などの依頼演奏に出演した。他にも、小学校や児童館にボランティアに行き、夏休みの宿題を教えたり、夏祭りの手伝いをした。子どもたちがエイサーを教えてくれて、一緒にエイサーを踊ったり、三線を弾いたりした。沖縄の小学生は、けんばんハーモニカやリコーダーに加え三線も皆授業で教わるのである。

茨城では、サークルやボランティア活動は全くやっていなかった。とても行動力がついたと思う。いろいろなことにチャレンジして、沢山の人と知り合って、視野や行動を広げると、それは最終的に全部自分にとってプラスになると思う。

行動することによって、将来のことを考えられるようになったし、様々な考え方を持つようになった。時間がある大学生の今だからこそ、勉強も遊びも、やらなきゃいけないことがたくさんあるのだ。

今回の沖縄留学は、沖縄で学びたいことも学べたし、自分を成長させるとてもいいきっかけになった。

【1面から続き】

最も印象に残ったもの

文化交流学科4年次　五十嵐 恵美

私は、7月17日に日立サンドアートフェスティバルにスタッフとして参加してきました。この日はとても暑く1日で真っ黒になりました。

サークルや部活に参加していない私にとってこのイベントは、友達と一つのことをやり遂げることのできた、大学生活の中で、最も印象に残るものとなりました。

サンドアートは、3週間ほどかけて作りあげられ、最後には、7分間で千発を打ち上げる花火が、日立の夏の一大イベントになりつつあります。ぜひ、足を運んでみてください!!

【岩間先生と学生のみなさん】

学生が着用していた緑色のTシャツには「IBARAKI WITH HOPE We can cope 希望と共に乗り越えよう」の文字がプリントされていました。

【美術部の作品】

ロンゴロンゴとは南太平洋ポリネシアのイースター島で昔作られていた「物を言う板」です。この板には文字のようなものが書いてありました。この文字はまだ解読されていないそうですが、これは島の人々に歴史や情報を伝える板でした。

編集後記

紅葉のシーズンになってきました。今年は異常気象だからなんだかで葉の育成が乱れ、綺麗な紅葉ではなく、赤や黄色に、緑の入り混じった景色になるそうです。天気予報士の森田さんが言っていました。

「まっかな秋」でなく「まだらな秋」……日本の新しい季節の誕生でしょうか。

［国井 美紀］

卒論を書いています。自分は一体何を主張したいのか…などと試行錯誤しています。4年間の集大成となるよう頑張りたいと思います。

だんだん寒くなってきました。早くお気に入りのコートが着たいなーとうずうずしている今日この頃です。

［中根 梨紗］

十月号を十月中に出せそうなので、スケジュールコントロールが少しはできるようになってきたかなと感心しています。編集作業も自分たちで進めてくれるので、編集アドバイザーは、最後の仕上げ作業だけすればいいようになってきました。

これで一安心という気分にはなれなくて、同じような企画が続いているね、レイアウトも刷新してみては、などとついつい思ってしまうのは、編集アドバイザーが度し難く欲張りだからでしょうか？

［藤田 悟］